

乳幼児の水分摂取機能発達に関する研究  
第4報ストローによる水分摂取習得までの経時的観察

○大久保真衣, 石田 瞭, 川田敬弘\*, 服部美鈴\*,  
細谷美穂\*, 松原範宜\*  
(東歯大千葉病院・摂食・嚥下リハビリテーション・  
地域歯科診療支援科, \*コンビ株式会社・プロダクトセ  
ンター)

【目的】

我々は第47回本学会学術大会で水分摂取機能発達について検討をおこなった。その結果保育者の中には、すすり飲みが不十分のままストローでの水分摂取する場合がある事が判明した。また外出時にストローがあると利便性が高まるなどの理由から、保育者が早期からストロー使用を希望する場合がある。この時子供の水分摂取機能の発達をできるだけ妨げない摂取方法を考える必要があると考えた。本研究では、ストローでの水分摂取に注目し、規定のストロー練習用吸い口付容器を使用した水分摂取を観察した。これによりストロー習得までの水分摂取機能発達を経時的観察にしたので報告する。

【対象と方法】

対象児は、保育者がストロー飲みを積極的に使用したいと考える、心身共に異常を認めない乳幼児のボランティア12名中、本研究の項目が調査可能であった健康乳幼児11名とした。開始時、最低月齢児は6か月、最高月齢児は10か月であった。方法は、2009年6月から2010年3月までほぼ毎月、実際に水分摂取している様子を評価および撮影をした。またこの期間に、保育者からみた児の水分摂取できた日をアンケート記載することとした。アンケートはほぼ毎週とし、自由コメント欄は様子や感想等の記載とした。開始時以前に水分摂取できた項目については、保育者の記録から引用した。期間中の使用食具として、ストロー練習用吸い口付容器は規定した。それ以外の水分摂取の食具選択は保育者の自由とした。また開始時期も、保育者の自由とした。開始時、全対象児がストロー飲み、すすり飲みはできなかった。

ストロー練習用吸い口（以下吸い口）の形態は大小2タイプとした。評価方法は吸い口部を口腔内へ引き込む長さ、顎の上下運動、舌突出の有無とした。ストローの評価方法も同様とした。また対象児によっては外部観察評価以外にも、摂取中の舌運動の評価に超音波診断装置を用いることもあった。さらにスプーンやコップを用いたすすり飲みの評価を行い、すすり飲みが確認された後、調査終了とした。

【結果】

吸い口の大タイプでこぼさず摂取するようになったのは、平均月齢7.6か月であった。吸い口の小さいタイプをこぼさず摂取するようになったのは、平均月齢8.2か月であった。いずれも全対象児が吸い口を全て口腔内に入れて摂取していた。ストロー摂取では、こぼさず摂取するようになったのは、平均月齢9.8か月であった。ほとんどの児がストローを約15mm程度口腔内に入れ摂取していた。その後3名がストローの先端のみを捉えて水分摂取していた。この3名は、その頃連続すすり飲みがほぼ可能となっていた。

今回の吸い口を使用した場合、ストロー飲みからすすり飲みができるようになるまで平均0.8か月経過程度であった。

ストローの形態で、ストローを咬むことにより弁が開き中の液体を吸引させるというものがあつた。そのストローを使用していた2名では、顎の上下運動を行いながら水分摂取するという動きが他のストローやすすり飲みでも認められた。またストローのみで全ての水分摂取をおこなっていた児が1名おり、すすり飲み習得までかなりの時間を有した。

【考察】

我々は前回調査した結果では、ストロー飲みを先行して行った場合、すすり飲みを習得できた時は、ストロー飲みから約4.6か月経過してからであった。今回、吸い口を使用することにより、約0.8か月経過後にはすすり飲みを習得できた。これは吸い口部の直径が短く、長さが短いため、口唇閉鎖機能を多大に阻害しなかったためと考える。

またストロー飲みで水分摂取をおこなっていても、頻繁にスプーンやコップなどですすり飲みのおこる機会を作ることが必須であると考えられる。